時事新報

米國直輸出生絲論　二

我生絲は米國を招得意と定む可し

生絲は、我國第一等の物産にして百年富國の計を樂すれば年々内に其産額を增加すると同時に歳々外に其販路を開拓し世界生絲の需要者を一手に引き受くるの氣概なかる可らず即ち此生絲の得意先きを求むるに就ては歐洲と云ひ米國と云ひ其處を好惡するの別れあく殊に歐洲諸國へ向け我生絲を輸出したるは開國後、間もなき事にして取引の年所多きに隨ひ需要の區域も相應よ廣く今後ますく其區域を廣めんと勉强せざる可らざるみと勿論なれども抑も歐洲大陸は大小邦土犬牙して國力平均の關係より動もすれば兵を境上に集め戰雲飛揚して殺氣慘澹たるみと毎度なるが故に外交政略の抑揚は忽ち商賣上の活機に響き眞實戰端を開くが爲めのみあらず某國帝と某國帝が會見しさりと云ひ某國の宰相が云々の演說を爲したりと云ひ是より以下瑣末の事に至るまで警察臆測の種となり取り止めもなき風說に因りて物價の浮沈を致すと珍らしからず特に彼の絹織物の如き華奢品は銳敏に影響を蒙り易く同時に生絲相場を動かして一上一下、商賣上の定則に從はず爲めに生絲の商法をして一種の投機業たらしむるは自から是れ歐洲の風勢にして生絲製産者たる日本人より見れば歐洲の市場は云はゞ亂雜不定にして非常に儲かるとあれば又非常に損するとあり損益を天に任ずる者にして誠に不安心なれども米國に至りては則ち然らず本來米國は商業を以て立國の主義と爲すのみならず國交際の面倒なる歐洲地方と程隔りて外交略の抑揚も大西洋を隔りて來らず且つ其絹織物の如き自國の需要に應ずるが爲め自國にて製造する者あれば國中に大變亂を見ざる限りは其相場の一上一下、何れも商賣上の定則に由り市場目から穩にして我生絲商人も此市場に向ては安心して賣込を爲すとを得べし且つ米國の織物業は近年著しく進歩して初めより之れと緣故ある我生絲の輸出額も亦此一方に向て增加し前十年間を回顧して日本生絲の海外輸出は大に增加したりと云へど其增加は米國向きのみにして歐洲向きの我生絲は十年一日の如く殆んど進歩なしと云ふも可ならん今横濱外國人商法會議所の調査に據るに明治九年度より同二十二年度まで歐洲並に米國へ輸出しさる我生絲の仕譯表は左の如し

年度	歐洲	米國
明治九年	二、〇六七	一五〇
一千八百七十六年		
明治十年	二〇、六二三	一、四二二
一千八百七十七年		
明治十一年	四六、〇五七	三、一〇〇
一千八百七十八年		
明治十二年	二三、七二二	五、一七五
一千八百七十九年		
明治十三年	一六、九六三	五、三七六
一千八百八十年		
明治十四年	一四、七五四	七、〇二二
一千八百八十一年		
明治十五年	一九、一四五	九、五八七
一千八百八十二年		
明治十六年	二〇、一二四	九、九八五
一千八百八十三年		
明治十七年	一四、二六〇	一一、一四三
一千八百八十四年		
明治十八年	一五、〇三四	一五、〇〇二
一千八百八十五年		
明治十九年	一四、〇〇二	一四、九六四
一千八百八十六年		
明治廿年	一七、九六四	二〇、九六四
一千八百八十七年		
明治廿一年	二一、三四三	一九、九二七
一千八百八十八年		
明治廿二年	二二、五〇二	一四、二二二
一千八百八十九年		
六月ヨリ七月迄		
七月ヨリ十二月迄		

右の次第なるが故に我生絲商人は機業の進歩著しくして市場の根據穩かなる米國を以て常得意とし永遠取引の根本を先つ此處に打ち立て夫より歐洲諸國を始め枝葉の隅々に手を廣げ世界生絲の需要者を一手に引き受けんとするの手段を盡すと商賣の順序に於て然る可きものならん然るに近來米國の生絲市場を見るに歐洲並に支那絲は漸く我勁敵ならんとし我れ若し油斷して盧を示さは彼れ直に之れを擒かんとするの狀勢なきに非ず回顧すれば明治十四年の末なり横濱聯合荷預所と居留外國商人との葛藤あり一時我生絲の輸出を止めたるとありしが米國の機屋は當時日本絲の供給を絶たれて已むを得ず歐洲絲を購入し以て其場を間に合はする中、凡そ機屋の習慣として一種の絲を使用し慣るれば他と變更するを好まざるの風あるが故に彼の葛藤の後今日に至る迄上等絲は常に歐洲產に制せられ我生絲の販賣上每度困難を感ずるに至りたるのみあらず先年伊佛間に不和を生じて佛國は伊太利の生絲に對し重き關稅を課したるを以て同國生絲商人は其販路を米國に開かんと勉强するを以て同國生絲商人は其販路を米國に開かんと勉强すると大方ならず之れが爲めにや前號の紙上に掲載したる一表中にも明白なるが如く明治二十一年度より米國輸入の歐洲絲は俄に一千俵前後の增加を致せり扨て又支那絲は如何と云ふに絲質は天下第一流にして光澤强力、他に其比を見ず雖も從來其製法は手繰りにして之を織物に使用するとは出るが故に十餘年來一日の如く絲に一歩の改良なければ輸出にも亦增加なくして兩三年前まで引き續きたりしが近頃彼の生絲家も少しく悟る所ある者の如く製絲に機械を用ひ始めたるに果して米國人の需要に適し伊太利絲と同樣に俄に其輸出額を加ふるとは爲れり即ち米國の市場には歐洲並に支那絲ありて我生絲と競爭せんとするの勢あるが故に我生絲商人は決して安閑たる可らず先つ我常得意たる可き彼の生絲市場の景況を審かにして賣込上に將た製絲上に十分の改良方藥を導き他の生絲取引の未だ繁茂せざるに及んで早く我取引の根本を定め枝葉鬱然他を蔽ふて其成長を許さゞるの覺悟あかる可らざるなり

雜報

○坪井仙次郎氏　鳩根縣師範學校教頭なる同氏は過日來校務を帶び出京中なりしが今回同校へ下賜相成りたる兩陛下の御寫眞を拜戴して本日歸縣するよし

○米國公使館移轉式　同公使館は今度新築したる赤坂復坂町へ移轉せしを以て來る十六七日頃内外貴顯を招待して新築移轉の式を擧ぐるよし

○自由の眶者　自由黨の機關として昨十四日大坂に於て初號を發兌する「自由」は花香恭次郎氏主筆となり畑下熊野氏も專ら其編輯に從事する趣あるが孫てより同地東雲新聞の眶者たる兆民居士中江篤介氏も自由の編輯をも助る事となりたるよし

○函館造船所、函館の豪商渡邊熊四郎、平田文右衛門兩氏の所有に係る同港の函館器械製造所は近來沿海運輸の汽船及諸製造所の事業追々增進せしを以て隨て同製造所の工業も益々繁劇を來したる折柄本年四月初旬一朝觀融の災を罹り工場忽ち烏有に歸したり尤も其以前同道龜山の商船組長岩田桑藏氏は同港に船渠を設置せんみとを企圖し曾て東京の有志者にも謀りて其計畫中右に眶する如く火災に罹り公衆一般爲めに不便を感じ一日も忽にす可らざれば速に之が再興を謀らんと去る四月中上京し偶々右器械製造所持主も上京中なるを以て持主とも協議の末本月初旬築地壽美屋に於て園田貞德、渡邊熊四郎、平田文右衛門、平田喜三郎其他十餘名集會を催はし園田氏を委員長に岩田、渡邊、平田諸氏を委員に撰み創立事務を擔當するとに決したり其要領を聞くに右器械所の物件一式を利用し併て六七百圓の船を築るゝ船渠を設け更に函館造船所と改稱し資本金三十萬圓の有限責任の會社組織と爲す計畫にて森岡昌純、吉川泰二郎、安田尊次郎氏等贊成し彌々其筋へ出願する由にて岩田氏は近日歸途に就く都合なりと云ふ

○家屋取拂ひの地所　市區改正に付日本橋區西河岸町通りは三等道路十間幅にするとなり通一丁目十九番地より西側通り西河岸町一番地より十七番地迄を取拂ひ氣遣ひしかど昨今の氣遣ひしかど昨今の氣遣ひしかど昨今の